

# 中学へ上がった日

小川未明

青空文庫



毎日まいにちいつしよに勉べんきよう強きようをしたり、また遊あそんだりしたお友ともだちと別わかれる日ひがきました。今日きようは卒業そつぎようしき式しきであります。式しきの後あとで、男おとこの生徒せいとたちは、笑わらったり、お菓子かしを食たべたり、お茶ちやを飲のんだりしましたけれど、女おんなの生徒せいとたちは、さすがに悲かなしみが胸むねにかえるとみえて、だれも笑わらったり、おせんべいを食たべたりするものはありませんでした。

てつお　哲夫てつおは、校長こうちやうせんせい先生せんせいのおつしやつたことが、いつまでも耳みみに残のこっていました。

「日にっぽん本の非常ひじようじ時のことことは、もうみんなよくわかつていると思おもいます。これから世よの中なかへ出でて働はたらくものも、また上うえの学がっこう校こうへい

つて学まなぶものも、第一だいに体からだを大事だいじにして、いかなる試練しれんにも、打う  
 ち勝かつ覚悟かくごがなければならぬ。そして、お国くにのため、世よの中なかの  
 ために働はたらく、りっぱな人間にんげんとなつてください。これが、私わたしから  
 みなさんに申もうしあげ最後の言葉ことばです。」  
 いよいよ卒そつぎよう業せいした生徒せいとたちが、お免めんじよう状じようを持もつて家いえへ帰かえ  
 るときでした。校長こうちよう先生せんせいは、わざわざ廊下ろうかへいすを持もち出だし  
 て、一人ひとり、一人ひとりの顔かおをじつとごらんになりました。そのとき、眼め  
がねの底そこの先せん生せいの目めは、涙なみだでうるんでいました。男おとこの生徒せいとの中なかに  
 は、その前まえを平気へいきで通とおつたものもあるが、女おんなの生徒せいとたちは、いず  
 れもハンカチで目めを押おさえて過すぎました。

哲夫てつおは、学がっこう校もんの門でを出でると、やはり悲かなしみがこみ上げてきま

した。もう明日あすからは、この門もんを通とおらないであろう……と、幾いくたびとなく振り向むいて、あちらへ道みちを曲まがったのです。

「宮田みやたくん。」と、彼かれは、前まえへいく少しょう年ねんに声こえをかけました。少しょう年ねんは、立ち止どまって、哲夫てつおを見返みかえると、につこり笑わらいました。

「宮田みやたくんは、どこへ入はいったの？」と、哲夫てつおはききました。少しょう

年ねんは、すこし顔かおを赤あかくして、

「僕ぼくは、もう学がっこう校こうをよして、家うちのおてつだいをするよ。」と、

いいました。

「そうかい。」と、哲夫てつおは、うなずきました。

二学期がっきのときでした。宮田みやたがいったことを思おもい出だしたのです。

「僕、こんどの試験に甲を三つとれば、お母さんが、自転車を買ってくれるといったよ。」

しかし、その後、自転車を買ってもらったという話をきかなかつたから、甲が三つとれなかつたのだらうと思ひました。けれど、宮田くんのお母さんは、やさしい、いいお母さんだという感じがしたのでした。宮田くんの家は八百屋です。

「先生は、勉強をしても、働いても、その精神に変わりがなければ、お国につくすと同じだとおっしゃったから、大いに働きたまえ。」と、哲夫は、いいました。

「君は、どこへ入つたのだい。」と、宮田は、ききました。

「僕は、中学へ入つたけれど、ついていけるか心配なんだ

よ。」

「君は、だいじょうぶさ。」

「それに、君は、体が弱いんだものね。」と、哲夫は、なぐさめ  
ました。

「働けば、体が達者になるって、お母さんがいったよ。」

二人は、途中で、右と左に別れました。哲夫は、また中

学の入学試験にきていた不幸な少年を思い出したので

す。当日、哲夫は、お母さんにつれられていったが、控え室に

松葉づえをついた少年が、姉さんにつれられていていまし

た。ほかの少年たちが元気であるのに、その少年は、青

白い顔をして、弱々しそうでした。そのうちに、ベルが鳴つ

て、試験場へ入るときがきました。「おちついて、しっかりおやり。」とか、「よく問題を見て、あわててはいけません。」とか、いう声が、そここできかれました。哲夫は、お母さんを残していきかけると、松葉づえの少年もいつしよにいきかけました。

「だいじょうぶかい、おまえは、できなくてもいいんだよ。」と、姉さんが、少年の耳に口をつけていっていました。これをきいたとき、哲夫は胸が熱くなりました。試験場へ入ると、すべてのことを忘れてしまいました。算術と読み方の試験をすまして、哲夫は、ふたたび控え室へもどると、そこには、お母さんが、じつとして腰をかけて待っていていました。



「どうだったたい。」と、お母かあさんは、我が子わこの顔かおを見ると、すぐおつしやいました。

「やさしいんだよ。」と、哲夫てつおは、こともなげにいつて、そばをみると、少年しょうねんの姉ねえさんが、うつむいて、考かんえ顔がをしていました。松葉まつばづえの少年しょうねんが、まだ試験しけん場じやうから出でなかつたのです。入にゆう学がくの日ひには、哲夫てつおは、ひとりで学がく校こうへいきました。そして、控ひかえ室しつに入はいつてあたりを見みまわしました。

「松葉まつばづえの少年しょうねんは、及きゆう第だいしたろうか。」と、思おもつたからです。どうしたのか、その姿すがたは見みえませんでした。このとき、思おもいがけない事じけん件けんが起おこつたのです。すぐ自じ分ぶんのそばに生なま意い気きな少年しょうねんが、三、四にん人にんいました。

「きよう帰りに、どこかへいこうよ。」

「僕、まだ、本を買わないんだぜ。」

そのとき、カチンという音がしました。

「あつ、拾銭どつかへやつちやつた。」

彼らは、さがしたけれどもなかつたようです。——哲夫が、しば

らくして、くつを上げると、下に白銅がころがつていました。

「ここにあつた。」と、哲夫は、拾つて、落とした少年に渡

しました。

「ずるいや、ごまかそうとして。」

「だれが。」と、哲夫は、かつとなりました。

「おい、けんかする気か。」

「なに。」と、哲夫は、少年の横顔をなぐりました。たちまち、控え室で組み打ちがはじまったのです。

「よせ、おまえがわるいのだ。」と、仲間が少年を引き離そうとしました。片方から、どこかのおじさんが、

「二人とも、日本の子供じやないか。」と、いいました。哲夫は、はつとして、手を放したが、目から、くやし涙がながれてきました。

「そうだ、僕はもう中学生なんだ。」と、肩を上げて突つ立ったまま、彼はさびしく微笑んだのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「台湾日日新報」

1939（昭和14）年4月16日

※表題は底本では、「中学《ちゅうがく》へ上《あ》がった日

《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「中学へ上つた日」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 中学へ上がった日

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>